米国における最近の幼児教育の諸問題

L・W・ベンナー

米国、マサチューセッツ州、マウントホリヨーク大学で幼児教育を担当しておられるL・W・ベンナー教授は、一九五八年に、フルブライト交換教授としてお茶の水女子大学で幼児教育の講義を担当しておられましたが、今回、インドに行かれる途中、日本に数日立ち寄られました。ここに掲げる文章は、その際に、小さなグループで講演をお願いした際の翻訳です。

一九六七年、七月十四日　　東京、麻布鳥居坂、国際文化会館にて

主催、お茶の水女子大学　ＩＣＲＣ会（国際児童研究センター）

津守　それではこれから、ベンナー先生のお話の会をいたします。九年前にこのようにしてお話ししていただきましたので、九年の歳月を経て、再びお話しいただけることをうれしく思っています。最初に松村先生にご挨拶いただきましょう。

松村　ベンナー先生がいらして、お話しいただけることをたいへんうれしく思います。この九年間の間に、変化したことや、変化しなかったことや、いろいろあります。ベンナー先生もあまり変わっておられないし、私どもも自分自身ではあまり変わったとは思っていない。変化したことの大きな点は、多分、みんなの研究が進んだということだろうと思います。ベンナー先生も今回は遊びの研究でインドにいかれるところだとうかがっていますし、津守先生や私どもの研究もいろいろと進みました。そのような状況の中で、きょうここで会合がもてることはうれしいことです。ベンナー先生はこのような進歩のひとつの動機づけとなってくださった。とくに、国際的な関係の中で考える態度が、みんなの中にできるのに役立ってくださったと思います。「幼児の教育」の八、九月号は、外国の文献を紹介した特色のあるものですし、今後ますます、こういう交流を深めていかねばならないでしょう。ま

た、きょうこの会を主催しているのは、ＩＣＲＣ会といって、インターナショナル・チャイルド・リサーチ・センター、すなわち、「あいくるしー会」です。この会ができるにあたっても、ベンナー先生がきっかけになっていたと思います。きょうは、ささやかな会ですが、この会の名前のように、なごやかに話し合いたいと思います。

ベンナー　きょうは、ここに会合をもっていただいて、お茶の水女子大学の古いお友だちの方がた、ならびに幼児教育にたずさわっておられる方がたとお話しできますことは、ことばでいいあらわせないほど、うれしく思っております。九年前に私は、日本でほんとうにたのしい日日を過ごしました。昨晩も友人に手紙を書いたのですが、再びこの東京の土を踏んでいることは、ほとんど信じられないような気持がしています。東京を去る日に、松村先生は、すばらしいことをいってくださいました。私が日本にきたときには、まるで幼稚園の子どものようなお箸の使い方をしていたが、いまは、みてごらんなさい、青年のようだと。私も日本にいる間に、こんなに成長することができたのでした。

さて、きょうは、津守先生から、米国の最近の幼児教育界の諸問題について話をするようにいわれているのですが、私どもがいまぶつかっている二、三の問題について、雑談的にお話しすることにいたしましょう。

最初に、いま米国でとり上げられているひとつのプログラムについて述べましょう。私もそのプログラムに関係しており、このために多忙をきわめているのですが。みなさん、ヘッド・スタート・プログラム（Head Start Program）ということをきかれたことがありますか。

ヘッド・スタート・プログラムについて

二年前に、米国連邦政府は、いわゆる貧困対策法案を通過させました。その法律のもとに、貧困地域の幼児のために、莫大な金額の予算が使われることになりました。これがヘッド・スタート・プログラムとよばれるもので、人生の出発点である幼児期に、将来の生活の基礎となり、またそれに役立つような生活を与えようとするものであります。これは政府のプログラムで、いわゆる「文化的に恵まれない」子どもにのみ与えられるものです。すなわち、経済的に低い水準にあり、家族を支えるだけの収入のない家庭の子どもたちに、良い生活のために必要なものを与えようとする試みです。その具体的なプログラムというのは、できるだけ理想的なナースリースクールや幼稚園を、この子どもたちのために用意するということであります。いや、さらにそれ以上のものが、ここで考えられています。私がここに参ります前にしていたことは、この夏に、この「恵まれない子どもたち」のために働く人たちの訓練のプログラムを管理するということでした。これは、現在、米国全土の各地においてとり上げられており、このた

めに、莫大な金額が投入されています。多分、みなさんも、国家が多くの金をつぎこむとするならば、このようなプログラムは、まさにそれに価するものであることに賛成なさるでしょう。

このヘッド・スタート・プログラムは、現在の米国において、まさに、注目すべきものですから、もう少しこのことについて説明しましょう。

「文化的に恵まれない子どもたち」というのは、両親が経済的に貧困なものであり、家庭の条件がよくないものです。したがって、子どもの教育を考えるだけでは不十分で、他の側面も考えられねばなりません。ヘッド・スタート・プログラムは、そこでたいへんいろいろの側面の仕事をふくんでいます。医学の面から、歯科の面から、社会福祉の面からの援助をもとめ、ソーシャルワーカーが教師と協力して、子どもの家庭的背景や、それぞれの家庭の必要としているものを理解しようとします。栄養士がいて、子どものとるべき食物について考えます。また心理学者がいて、子どもの学習に関係して問題の生じたときに助力を与えます。その他いろいろの問題行動について、精神科医が助力を与えます。これは、このように多くの関係者と教師が集まって、幼児教育の場を中心として協力しているチームワークです。そこで、これは児童発達センターとよばれます。医者や歯科医や栄養士は、学校だったら何をしたらよいかわからなくても、児童発達センターならば、積極的に参加できます。

もう一つ特徴的なことは、母親の参加です。ここにくる子どもたちの母親は、いつでも、このセンターにくることを歓迎され、のみならず、積極的に参加します。

ここに、ヘッド・スタート・プログラムのことを説明した小さなパンフレットがあります。これは七冊分あり、みんな違う色の表紙なので、「レインボー・ブックス（虹の本）」といわれます。デイリー・プログラム（日案）、職員構成、医療管理、栄養、問題行動、両親教育など、あらゆる面が取り扱ってあり、たいへんよくできています。このパンフレットは、ヘッド・スタート・プログラムで働こうとするすべての人に、訓練のテキストとして与えられます。

多分、皆さんが興味をもたれることの一つは、このプログラムでは、十五人の幼児に一人の教師が担当し、さらに、教師の助手が一人つくことでしょう。十五人というのは、一人の教師が指導可能の人数です。その助手は、常に、その「文化的に恵まれない」地域の母親です。教師、助手、ソーシャルワーカー、ボランテアは、みな、同じプログラムの中で訓練をうけます。この母親たちは、おそらく、その生涯の中で、はじめて、自分が社会的に「一人前」に扱われる経験をするのです。このことは、多くの場所で証明されたところであり、このヘッド・スタート・プログラムの重要な長所の一つです。両親はいつでも歓迎され、いつでもセンターに入ってくることができ、共に働くことができます。そし

て、ここで、「友人」を見出すことができます。次にたいへん興味深い一例をお話し致しましょう。

私は米国のヘッド・スタート・プログラムの全国組織の委員をずっとつとめてきました。また、大学で教えるかたわら、私の住む地域の組織の相談役もしてきました。その地域のある児童発達センターで経験したことです。二、三か月前、そのセンターを訪れたとき、今まで見かけたことのない一人の婦人が目にとまりました。彼女は、それは張り切っていて、たえず忙しくとびまわっていました。客にコーヒーをすすめ、お皿を洗い、子どもたちの給食の世話をし、片ときの暇もなく、まめまめしく立ちはたらいていました。私は、何とまあ、有能な婦人だろう。いったい、どこからこんな人をみつけてきたのだろうかと思いました。彼女は親しみ深く、幸福そうで、まさにそのことを楽しんでいるように見受けました。そこでそこの主任教師に、あの婦人はどういう人ですか。あれはだれですかとたずねました。するとその主任教師は答えました。「あの婦人は、ここの子どもの母親のひとりなのです。あの婦人は先日の朝十時に電話をかけてきました。そしていいました。わたしは家でたったひとりなのです。わたしはひとりでいたくないのです。センターにいってもいいですか。と。ええ、もちろん、いいですとも、どうぞおいでくださいとこたえました。」この婦人は精神的に疲労し、ひとりでいることに耐えられないのでした。それでも、このセンターのことを覚えていて、ここに来て、だれか他の人といっしょにいようという気持を起こしたのは賢明なことでした。児童発達センターは、このような母親に温かい手を伸ばしているということは意味のあることだと思います。センターは、この母親にとっては治療的な役割を果たすことができました。もちろん、センターはこの種の母親への奉仕だけを行なっているのではありません。しかし、しばしば、このような母親に手をさし伸べることが、子どもの発達に役立っているのです。母親を、子どもの集団の教育の場からしめ出してしまうことはよくありません。そうするならば、子どもが経験することと、母親が経験することと、そしてセンターとの間に、大きな壁を作ってしまうことになるでしょう。

私はきょうここで、ヘッド・スタート・プログラムのことだけで時間を費やそうとは思っていません。しかし、もしもあなた方がきょう米国にこられるならば、幼児教育や児童発達のことに関心をもつ人々は、かなりの時間と労力を、このプログラムのために使っていることを見るでしょう。その使い方は、それぞれに応じていろいろあります。私自身は、ずっと、このプログラムの顧問をつとめてきましたし、昨年も今年も、このプログラムのリーダーの訓練プログラムに関係してきました。昨年はある地域の幼児教育のリーダーの訓練をしましたし、今年は私どもの地域のセンターの全体の管理に参与しています。

このセンターにくる子どもたちは、いわゆる「文化的に恵まれ

ない」子どもたちです。ところが、この子どもたちは、文化的には豊かなはずの子どもたちよりも、ずっと恵まれた教育をうけているという逆説が生まれます。彼らは、このセンターで与えられているほどの環境を与えられていないということでは、むしろ「恵まれない」ともいえるかもしれませんね。義務教育を受けている幼児―いや、私のいう意味は、公立幼稚園ということです―は、米国の幼児人口の半分にすぎません。ですから、たくさんの幼児が、父親がいくらかよけいにお金をもっているという理由で恩典にあずかれないわけです。

とくにここで私がヘッド・スタート・プログラムについて、皆さんに強調したいことは、それが児童発達と幼児教育の原理に立って実施されているということです。いまや、数多くの資料が、「文化的に恵まれない子ども」について、彼らは、何を必要としているか、またどうしたら、彼らの可能性をひき出すような学習をさせることができるかというようなことについて印刷報告されています。彼らは可能性を持っているけれども、それは動機を与えて、使うようにしなければ、眠ったままでいるものです。そして、米国では、「文化的に恵まれない」子どもたちに、このプログラムを与えることによって、どのようなことが起こるかということに、実に多くの関心が寄せられています。

ここで、私がお話しするだけでなく、どなたか質問やご意見があったら、話してくださいませんか。

津守　最近の米国の専門紙をみますと、ヘッド・スタート・プログラムのことがたくさん目にふれるのですが、ヘッド・スタートという名称は、どういうところからつけられたのですか。

ベンナー　それは私にもわかりません。米国では、いろいろの計画にときどきおもしろい名前がつけられますね。いま、高校生で、十六歳をこえると留年させてもよいことになっていますが、留年生のための援助計画があります。このプログラムのことを、アプ・アバウンドといいます。これもおかしな名称の一つです。ヘッド・スタートもどうしてこういう名前になったのか知りません。そういう名前になっているということです。でも、みんな、それはとてもいい名称だと思っています。ヘッド・スタートは、政府の援助計画の中でも、おそらくもっとも尊敬すべき計画であると思います。私の知っている信頼すべき人々のいうところによれば、この計画は将来も継続するだろうということです。議会は毎年、このような計画のための基金をあらたに検討するわけですが、幼児のためのこの計画は、真に価値があると考えられているようです。同じ貧困救済法案による年長児のための計画のあるものは、打ち切られるということです。その中には、大学生のための奨学金もあり、それについては私どもはたいへん残念に思っています。ヘッド・スタート・プログラムは打ち切られないようで、今年は三年目です。

もともと、ヘッド・スタート・プログラムは、夏期の八週間の

もので、小学校の一年生あるいは幼稚園にいこうとする子どもたちのためのものです。（米国では、入学期は秋である）地域社会もまた、このプログラムに参加します。連邦政府がその費用の大部分を負担し、一部を地域社会の自治体が負担します。全国のほとんどすべての地域社会が喜んでこの支出をしています。もちろん、ところによっては問題のあるところもありますが。これは自動的に毎年継続されるのではなく、一年ごとに更新されます。ある地域では年間を通じてのプログラムになっています。そして大多数の地域では夏期八週間のプログラムです。

幼稚園の遊び

ベンナー　松村先生は、私が一九五八年に、東京で教鞭をとっていたころ、遊びに興味をもっていたことをさきほど話されました。今日、私は以前にもまして遊びに興味を感じています。遊びに関する私の考え方、および、それがいかに子どもの発達に貢献しているかということの認識は、今日でも少しも変わっていません。いや、それ以来、ずっと同じ考えを抱いて生きてきましたから、そして、たくさんの子どもたちが遊ぶのを観察し、それがいかに子どもの発達に役立っているかを経験してきましたから、以前にもまして、遊びをたいせつに考えるようになっています。

津守先生は、私に最近の米国の幼児教育界において議論されている問題について話すようにいわれました。たしかに、いくつかの論争点があります。というのは、かならずしもすべての教育者が遊びに関して私どものような考え方を受けいれていないこと、遊びの子どもの発達に対する意味を理解していないことによるのでありましょう。そこで、一つの論点は、――これはいつも議論に上がる問題であり、それに対し反対して論争するものなのですが――それは技能的教科（Skill subject）を幼稚園に持ちこむかどうかということです。それは、私どもやみなさんは、小学校にはいってからが適当と思うものですが、ある人びとは、幼児期によむ能力をもっており、幼児はよむことを学びたがっており、よむことを教えるべきであると考えます。また、ある家庭や幼稚園では、非常に早くからよみかきを教えることに誇りをもっています。多くの人にとってこれは論争点です。何となれば、五歳児は発達するためにどうしても成しとげねばならない大きな発達課題をもっているからです。それはじっと坐って、よみかきを学ぶことではありません。それは遊びによって発達するものです。あなた方が幼稚園を訪問し、あるいは、そこで働いて、五歳児が遊んでいるところを見るならば、あなた方は、彼らがどんなに熱心に活動しているか、その子どもたちは実に明るく、頭をはたらかして生活しているのかを知るでしょう。そして、五歳児がよむことに熱心であるのは、ふつう、おとなが何か子どもに押しつけているからであるように思います。五歳で、本当によむことを好む子どもは、ほんのわずかのようです。もちろん、例外的な子どももあり

ます。大学の実験幼稚園や、児童研究所には、ずばぬけて頭の良い子どもがいて、幼稚園に入園するときにすでによむことのできるものもあります。四歳ですでによむことのできる子どももいます。昨年、私どもが接したある幼稚園児の話ですが、私どもが写真をとったときに、フィルムの容器から、長い巻紙に写真のとり方を書いた説明書が出てきました。私はその子がよむことができることを知っていたので、「クリス、ちょっときてごらん、こんな紙がフィルムのかんから出てきましたよ」といいました。するとその子は説明書をとって、私やあなた方がよむのと同じように、それをよんだのです。けれども、私はふだんその子どもがじっと坐って本を読んでいるのを見たことはありませんでした。彼はブロックつみきを組み立てるのが大好きでした。よむことは、この子どもの生活ではなかったのです。彼はたまたま、早くから字をよむことのできる子どもでしたが、そのことがこの子どものすばらしい喜びであったとは思いません。むしろ、心理的に解釈するならば、それは父親との同一化から生じたものだろうと思われます。彼の父親は学者でした。そして、父親がいうには、クリスが私をみるときにはいつでも、私は本を手にしていますということでした。クリスは父親のようになりたいと欲し、父親のやるようにしようとし、本をよむことを学んだのだろうと思います。これは親の押しつけではありません。このような子どもはときどきみかけられます。

さて、たしかに、遊びの機会を豊富に与える幼稚園と、非常に幼いときからよみかきの学習をいれる幼稚園との間に、いわば、ちょっとした戦いがあります。それはたんによみかきの学習の問題だけでなく、しばしば、市販されている材料、ワークブックを押しつけるという問題を伴っています。私はいつも先生たちに、それはセールスマンの力で伸びている、それだけのことだといっています。ワークブックの中に、すべてのものがふくまれているといわれます。しかし、ワークブックを使わないでやれば、もっとはるかに多くのことを成しとげることができるというのが事実です。ワークブックを市販している会社には、優秀なセールスマンがいるのですね。(笑い)

モンテッソリー法のリバイバル

もう一つ、最近、とくに四、五年のことですが、議論の的になっている問題は、モンテッソリー法のリバイバルです。モンテッソリー法は、最近、日本でもとり上げられていますか。

津守 雑誌などでいくらかとり上げられていますが、実際にモンテッソリー法を使っている幼稚園があるかどうか。

丹羽 それは、ありますよ。東京でも京都でも。

ベンナー それはたいへん興味があります。米国の教育雑誌、「子どもの教育」や、「幼児期の教育」は、モンテッソリー法についてのたいへん客観的な記事をのせています。みなさんご承知

のように、これはずっと昔にとり上げられた教育法です。私自身の意見は、これが今日のこの時代に、再びとり上げられてきたというのは、不幸なことだと思います。そこでは、最近において私どもが学んできた児童発達の研究の成果が考慮にいれられていません――これは私の解釈ですが。これは、一九〇〇年ごろ、というとずっと古い時代のことですが、モンテッソリーがイタリーで考案したこの方法だけをとり上げているのです。それは、もともと知的欠陥児のための訓練具で、特定の課題――ぼたんをかけたり、靴の紐を結んだりというような――を学習するように、こまかい手順がきめられているものです。日本からイタリーにいって、多額の金を使って特定のことにしか使えない材料を買って帰るよりも、私だったら、もっと創造的に、自分でためすことのでき、いろいろに使うことのできる教材や玩具を買ってくるでしょう。私自身の考えでは、今日、使用されているモンテッソリー教材の多くは、モンテッソリーの名に価しないのではないかと思うのです。モンテッソリー女史は、そのころと同じ材料が今日にまで引きつがれることを期待してはいなかったでしょう。私が理解するかぎりでは、ここにいろいろの混同があると思います。既製の材料を呈示することと、他方、あなた方や私がよいとは思わない学習形態と。米国の私どもの地域で、あるナースリースクールが、モンテッソリー法をとりいれて開設されましたが、そのやり方はかなり形式的で、子どもたちはある特定の仕方で振まい、行儀よくするように要求され、長い時間、同じ場所に坐っているように要求されます。これはモンテッソリー法による自己訓練の方法と考えられます。そこで、この方法を実施する以前に問われなければならない問題がたくさん残っているように思います。米国には、いま、モンテッソリー法による教員養成所が、コネティカット州に設立されています。そのことで、多くの教育者たちが困惑しています。何となれば、私どもの児童発達の知識ははるかに進歩しているのに、この種の養成所がつくられるということが、どうしてもぴったりとそぐわないからです。

知的側面の教育の強調

さきほど津守先生に、一冊の書物を見ていただきました。それは、「幼稚園の新方向」(New Directions in the Kindergarten, by H. F. Robison & Bernard Spodek, Teachers College, Columbia University, N. Y. 1965) という書物です。そこに示されている考え方は、長年の間、私どもは、子どもの社会的、情緒的側面の発達にのみ目を注ぎすぎてきた、――たしかに、幼児期において、私どもは、これがたいせつだと強調していることです――ということ。そして、おそらく子どもの知的側面の発達は、――その重要性はだれも否定しないでしょうが――それがあるべきほどに検討されなかったというのです。教師として、私どもは子どもたちが、多かれ少なかれ、自分自身のカリキュラムをつくりだし

ていくことを許してきました。私どもは子どもたちが事物に直面するようにしてきました。私どもはそれでよいのだと思っています。私どもは、子どもの社会生活、友だちとの関係など、および情緒の安定などを強調してきて、知的な面で、子どもにもっと挑むものがあってよいことを忘れがちになるかもしれません。この書物の試みていることは、子どもの知的な能力に挑む新しい方向について論じています。

さきほど、津守先生とお話ししていて、日本において、ブルンナー教授の理論が注目されていることを知りました。たしかに、子どもは、ふつう私どもが考えている以上に高度のことを学習することができることをしばしば発見します。子どもがいかに多くのことを知っているかに気がついて、驚くことがあります。それなのに、長い間、幼稚園は、いわゆる遊戯や歌、ゲームなどをやることで満足してきた傾向があります。そして、知的に深くふれていくことに失敗してきました。米国においては、ブルンナーの理論にも関心が寄せられていますが、私は、ピアジェの考えは最近、好意をもって受けいれられているように思います。ピアジェは児童心理学者ですが、人々は次第に知的発達を理解することに興味をむけるようになってきました。

前にお話ししたヘッド・スタート・プログラムにおいては、「文化的に恵まれない子ども」に、いろいろの種類の経験を与えることをしてきました。これはまさにピアジェが私どもに教えていることろであります。子どもはみな可能性をもって生まれてきています。この知的な可能性は、使うように動機を与えられ、機会を与えられなければ、――それは子ども自身の知的能力のことをいっているので、見せるためではありません――発達しないでしょう。ヘッド・スタート・プログラムについては、数多くの研究が行なわれていますが、知能検査による研究結果は、このプログラムの結果、ＩＱが上昇したことが報告されています。子どもが、物を直接に見て、やって、ためして経験することにより、こんなに大きな相違が生まれたのです。今では、子どもの知能は生まれながらのものであって、変化しないものであるというようには考えられていません。

一つ重要なことは、発達課題はそれぞれ、それに先立つ経験に依存しているということです。たとえば、乳児期には、歩くこと、話すようになることというような発達課題があります。このようなことが十分にできるようにならないとうまく次の段階に進むことができません。同じことが知的発達についてもいえます。二歳になると、こんな思考ができるようになり、四歳になるとまた別のことが起こり、六歳になるとまた別のことが起こります。もしもある段階の知的発達が、その前の段階の発達に依存しているとするならば、――ここに国際幼年教育協会で作った文献の引用集がありますが――たとえばオースベル（Ausubel）は、ある思考の発達がさらに高度の思考にすすむためには、直接経験とい

う背景が必要であることを述べています。このことは他の面の発達についても同様ですが。また、別の研究では、環境の重要性が述べられています。このような諸研究を通じて、今までとはやや違った点が強調されているのを見ることができます。私どもは従来、社会的な面での環境を重視してきましたし、今も、そうしています。私どもは知的な環境を無視してきた傾向があります。しかし、初期の経験は、知覚、認識、知的な機能の発達にとって、情緒的、気質的な機能の発達におとらず重要であることが明らかになってきました。

松村　社会的、情緒的なものから知的なものへと強調点が移ってきたということは、自発性の尊重から、創造性の尊重へという動きになぞらえて考えてよいかと思いますが。

ベンナー　いや、それは私のいっている意味とは少し違っていると思います。創造性の教育ということで失ったものがあるということを考えています。いや、創造的になろうと努力しているのですから、失うかもしれないといった方がいいのでしょう。ある人人は創造性ということで、子どもの発達的段階を考えない。ただ、子どもに物を与え、物事に直面させれば、子どもは創造的に考え、創造的にしていくのであると考えている。ところが、幼稚園の教師はもっとそれ以上のことを考えています。教師は、子どもがつみきをして、創造的に何か作っているのを見ます。教師はそこで、遊びの側面からもう一歩すすみ、そこで子どもの学習が行なわれるようにと考えます。何かいい実例をお話しできるといいのですが、多分、ここにお集まりのみなさん、幼児の仕事にたずさわっている方々ですから、私よりも実例をもっておられるでしょう。

津守　松村先生がいわれた自発性というのが、子どもを事物に直面させたときにあらわれてくるものをいっているのであり、それからもう一歩さきに進むことを創造性というように松村先生は考えておられるのだと思いますが。

ベンナー　ああ、そうですか、わかりました。そういう意味であるならば、創造性は知的過程ですね。

前にあげた書物の中には、いろいろの科学的概念をとりいれることについて述べています。さきほど、幼稚園の歌やゲームのことを述べましたが、これは今後も幼稚園の中でつづけて保っていきたいと思います。しかし、いま、私どもは、幼児の初期の時代から、物の科学や自然科学に関する概念の発達を見ることができることを確信しています。科学的概念は八歳になってはじめてあらわれるものではありません。子どもはいろいろの科学の基本原理——たとえば磁力や浮力などその他もろもろの——を、遊びの中で学んでいます。しかし、ボートを浮かばせて遊ぶということにとどまらず、そのことを意識にのぼらせ、そのことについて話し合うということをしたらどうだろうか、というのです。なぜボートは水の上に浮かんでいるのか、もしも石をのせたらどういうことになるだろうか、こういうことは、後になって、成長につれ

て次第に明瞭な形で、くりかえし学んでいく基本原理です。

私はすこし単純化してお話ししすぎたかもしれません。しかし、私どもは、幼稚園であまりにも多くのことをさせようとして忙しすぎるのです。多くのところで、いろいろのことをさせるための予めきめられたカリキュラムがつまっています。何かをつくり、歌をうたい、あれをし、これをするということに忙しすぎて、子どもが自分自身で考える時間がありません。教師の指導によって、みんなが何かを失うことのないようにしたいものです。

私は、現在の幼稚園は、もっとずっと自由なプログラムを必要としていると確信しております。何か興味あることが起こって、プログラムを変更する必要を生じたときには思いきって変更できるようなプログラム、子どもたちに、さあ、十時になりましたよ、みなさん、全部片づけてこちらにいらっしゃいという必要のないようなプログラム、それも、子どもたちがそんなに熱心にすばらしいことをしている最中にですよ、子どもにとって、この五分か十分は、まったくたいせつなのです。学習のための刺激や動機づけを与えるために、教師は、子どもが興味をもつような材料をそろえるのに、莫大な時間を必要とします。昨年の夏、ヘッド・スタート・プログラムの教師の養成講座のワークショップで、とても興味のある実例を経験しました。カリキュラムのワークショップでしたが、芸術と、音楽と、科学と、文学とにわけてワークショップをもったのです。科学のワークショップはすばらしいものでした。講師はあらゆる種類の生きもの、小さな昆虫をもってきたのです。それを材料にして科学的考え方について説明し、教師たちにいろいろのことをやってみせてくれました。教師たちは自分でもためしてみたくて、とても待ちきれないくらいでした。しかし、これだけのことをするのには、たくさんの準備の時間を必要としたに違いありません。こういうものが、子どもの思考を刺激するのによいのであろうと思います。

丹羽　いま、私、たいへん感銘をうけましたのは、子どもに動機づけをするのには、たいへん多くの準備を必要とするということです。その一つの例としてカリキュラムワークショップで、昆虫だの生きたものをいっぱいもってきて、みんなの先生が興味をもったということでした。先生のおっしゃることすばらしいと思うのですが、その準備というのが、とてもたいへんなことだと思いました。

ベンナー　もちろん、教師のもっとも大きな仕事の一つは、子どもが学習し、お互いにいっしょに生活していくために、環境をつくるということです。これはたいへんな仕事です。しかし、子どもがやってくる前に、教師がしておかなければならないことです。子どもの年齢がもっと大きいと、話は違います。そのときの準備は、幼児の場合とはたいへん違ったものであります。

丹羽　そのような教師になるためには、教師自身が驚く心をもたねばならないと思います。それによって、子どもと創造的になっ

ていくのだと思います。

ベンナー　そう、それです。それこそがたいせつです。自分自身を失った教師は、子どもに学習の興奮を伝えることはできません。何よりも、教師自らが、夢中になれるものをもっていなければなりません。

どうでしょうか、もう少し質問などあるでしょうか。

黒田　ブルンナーの理論と幼児教育との関係について、もう少しお話しくださいませんか。

ベンナー　私の経験から申し上げるならば、米国でたくさんの人がブルンナーの理論を尊敬していますけれども、彼の理論は、とくに幼児教育に関連していわれているのではないと思います。

ブルンナーはもともと、心理学の分野の出身です。私どもは、児童発達の観点から幼児教育をみるのですが、もちろん、この二つの分野は相互に密接に関連して動いているのであって、この間に大きな相異を見出すことはむずかしいでしょう。けれども、やはり、いくらか立場の相違があるようです。児童発達では、すべてのことが、子どもの全パーソナリティと関係していると考えます。心理学者にはどちらかというと、学習だけの面から考える傾向がありますが、私どもはもっと子どもの全人格の発達から考えます。

私どもはまた、子どもの「自己」(self)の発達にたいへん関心をもっております。二歳のよちよち歩きの時代に、自己を一人の人間として意識しはじめ、自分自身に関する感情をもつようになります。彼は自分の能力を知り、自分の限界を知り、そうしてはじめて、他人といっしょに生活することができるようになります。これは重要な点です。エリク・エリクソンは、八つの発達段階を認め、「よちよち歩きの時代」を自己の発達する時期としています。

また、ヘッド・スタート・プログラムの例にもどりますが、「文化的に恵まれない子どもたち」の多くは、自分自身に関するイメージをもっていません。自分自身がどのようなものであるかがわかっていません。自分の名前をよばれたことすらない子どももいます。自分自身を理解し、自分自身を受容するというような経験がないのです。

――このあと質疑応答が継続するが、以下省略。

津守　きょうは、ベンナー先生がわずかの滞在の時間を割いて、私どものために、米国における最近の問題についてお話しいただいてありがとうございました。米国の事情について直接、率直なお話をうかがうことができて、私ども、たいへんためになりました。これで本日の講演会を終わることにいたします。

ベンナー　そういっていただけると、私もお話のしがいがありました。そして、久々で皆さんと親しくお目にかかってお話しできたことをうれしく思いました。きょうはどうもありがとうございました。